

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月14日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22652054

研究課題名（和文） 母語に活かす英語ライティング指導 —マルチコンピテンス理論の検証
を目指して—研究課題名（英文） English Writing Instruction that Could be Reflected in L1 Writing
- Aiming at Verifying Multi-Competence Theory-

研究代表者

大井 恭子 (OI KYOKO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：70176816

研究成果の概要（和文）：Cook(2001)は外国語習得においては、外国語を学ぶことにより母語の力も伸ばすことができる、すなわちマルチコンピテンスとなりうると説いている。本研究では、英文ライティングを学ぶことにより、日本人の学習者が英文が本質的に内包している「論理的文章構成」を体得し、英文ライティングで培った論理的思考力や表現力がマルチコンピテンスとして学習者の能力の一部となり、それが必要に応じて母語、すなわち日本語での作文においても可能であることを、中学生と大学生の英語と日本語のライティングサンプルから示した。

研究成果の概要（英文）： This study aimed at verifying multi-competence theory in Japanese writing education. Cook (2001) advocates that through learning a foreign language, learners can also expand their ability in their mother tongue. That is to say, multi-competence will be formed in the students' minds. This study demonstrated that Japanese students exhibited better-organized, more logically written passages in their Japanese writing after they received instruction on how to write paragraphs/ essays in English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	150,000	1,450,000

研究分野：人文・社会

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：英語教育・ライティング指導・マルチコンピテンス・母語

1. 研究開始当初の背景

2008年3月に発表された新学習指導要領・総則によれば、これからの社会を生きていくためには、「基礎的・基本的知識・技能の習得の上に、それらを活用して課題を見出

し、解決するための思考力、判断力、表現力が必要になってくる」とし、新しい知の創造、すなわち「思考し表現する力の育成」を各教科を通じて行うことが必要になってくると

している。このように、今の教育界にあっては「思考力・表現力の育成」が焦眉の問題となっている。この力は、いうまでもなく、各教科でそれぞれ育成していくものであるが本研究では「論理的思考力・表現力」は英文ライティングを通して学ぶことができ、そして、英文ライティングで培った論理的思考力や表現力はマルチコンピテンスとして学習者の能力の一部となり、それが必要に応じて母語での作文やプレゼンテーションなどの発信力へも転移が可能であるという仮説の実証を試みるものである。

英語教育におけるライティング指導では、論証文(argumentative essay)というジャンルが確立しているように、英文を書くということはすなわち「論証責任」を負うということでもある。これは、自分のいいたいことがあるのであれば、それを聞き手、読み手に根拠を持って過たずに伝える責任があるというであり、この「論証責任」とは英語の文章を特徴付けているもののひとつといえる。英文を書く際にはこのような意識を常に持つことが求められている。

そこで、今の日本に必要な考え方の新たなパラダイムとして、「マルチコンピテンス(multi-competence)」という考え方を提唱したい。すなわち、外国語教授とは母語の能力向上をも視野に入れたものであるべきで、それは、Cook(2001)の言うmulti-competenceの考えにそうものである。今後の外国語教育とは、目標言語と母語を別個のものとして捉えるのではなく、両者の力全体を育てるマルチコンピテンス涵養として捉えるべきではないかと考える。つまり、母語、学習者の中間言語、そして目標言語としての第二言語という3者をばらばらにとらえる考え方でなく、学習者の母語とL2獲得に向かっている中間言語を抱合して一つの

能力と考えるものである

2. 研究の目的

本研究では、Cook(2001)の唱えるマルチコンピテンス理論の日本の英語教育現場での検証を目的とするものである。Cook(2001)は外国語習得においては、外国語の能力を伸ばすことばかりに焦点を当てるのではなく、外国語を学ぶことにより、母語の力も伸ばすことができる、すなわちマルチコンピテンス(multi-competence)となりうると説く。本研究では、英文ライティングを学ぶことにより、日本人の学習者が、英文が本質的に内包している「論理的文章構成」を体得し、そして、英文ライティングで培った論理的思考力や表現力がマルチコンピテンスとして学習者の能力の一部となり、それが必要に応じて母語、すなわち日本語での作文やプレゼンテーション力へも転移が可能であるという仮説の実証を試みるものである。「外国語のみならず母語をも伸ばす教育へ」と考えるパラダイムシフトを提唱し、実証する。

3. 研究の方法

(1) 研究主題・仮説に関する基礎的理論的研究を中心に行う。まずはCook(2001)の提唱するMulti-competenceの概念、およびライティング能力に関する理論的研究を行う。

(2) 事前調査として次のものを実施する。

- ① 中・高生を対象にした母語での「論証文」を素材にした事前調査(プレテスト)を実施。
- ② 大学生を対象にした「論証文」を素材にした事前調査(プレテスト)を実施。

大学生(1年生)のライティングの授業において、英語圏の大学でよく出題される論証文形式の文章を和訳して出題し、日本語にて解答してもらう。

(3) 実際の指導を展開する。

- ① 中学生を対象にした英語パラグラフ・ライ

ティングおよび論理構造の段階的指導の実践

- ・英語と日本語の文章の性質の違いを理解する。
- ・説得力をもって伝えるための方法を学ぶ。
- ・ 易しい英文を使った本研究者自作の「論理クイズ」で型にとらわれない発想法を学ぶ。
- ・ アイディアの出し方を学ぶ (アイディア・マップ、概念マップの有効利用)。
- ・ パラグラフ・ライティングの指導
- ・ 互いの書いたものを仲間で見合う(ピア・レビュー活動)ことで批評力を養う。

②大学生を対象にした英語パラグラフ・ライティングの段階的指導の実践

- ・英語と日本語の文章の性質の違いを対照修辭学的視点から理解する。
- ・「トールミンモデル」(Toulmin Model)などを利用し、説得力をもって伝えるための方法を学ぶ。
- ・十分なアイディアの出し方を学ぶ (アイディア・マップ)
- ・エッセイ・ライティングの指導

論証文を中心に様々なジャンルの文章の分析からはじめ、英文構成の概念を理解するとともに、論理の一貫性、結束性など英文を特徴付けている文体的特徴を学ぶ。

- ・ 互いの書いたものを仲間で見合う(ピア・レビュー)

(3)事後調査として、英文ライティングにて論理的文章展開を学んだ中学生、大学生に母語及び英語で論証文を書いてもらう(ポストテスト)。

4. 研究成果

(1)中学生に関してのマルチティコンピテンス涵養に関わる研究成果

- ①参加者：公立中学校3年生 26名
- ②テスト：次の題目で、プレ、ポストともにライティング(作文)してもらった。

英語：“Which do you prefer, living in a big city or in the countryside?”

日本語：「お金と時間とどちらが大事だと考えますか？」

③指導方法：2箇月半に渡り、教科書と並行して。上記方法でパラグラフ・ライティングを指導した。

④結果：

- ・英作文の量的分析

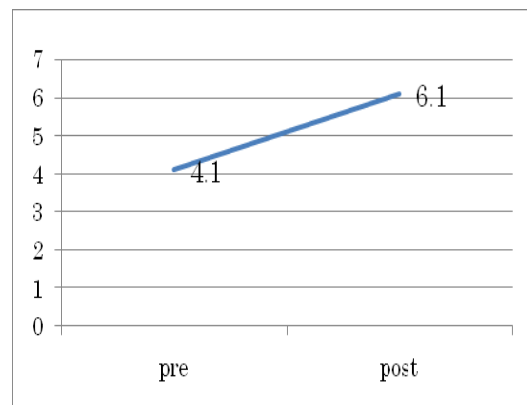


図1 中学生英作文量的分析

図1にあるように、英作文の全体的評価は有意に伸びた。

- ・英作文の質的分析

一例だけ取り上げるが、下記のように、質的にも argument がしっかりした英文を書けるようになっている。

Pretest:

I want to live in the city. Because. There are a lot of tall buildings. And, there are a lot of famous place. For example, Chiba city has a Chiba marin stadium. It is baseball park.

Posttest:

I want to live in the country. I have three reasons. First, country has a lot of naturals. There are many creatures there. Second, country has very beautiful festivals. For example, Omigawa has Gion festival. It is one of the our ward tradition.

- ・母語作文に見られる変化

Pretest:

自分は時間が大切だと思います。なぜなら時間はあらゆる自分たちの行動に必要です。例えば、勉強する時間、遊ぶ時間、テレビを見る時間、寝ている時間などこれらのような毎日の生活の中での身近なことにも時間は必要不可欠です。さらに物事に応じては時間を費やせば費やすほど良くなることだってたくさんあります。会社でも企画を練るときや何かを作るときにでも時間をかけることでそれらの質は高くなります。これらのように時間はたくさん使うことで物事の質を上げることに等しいことになるのです。

Posttest:

私は時間が大切だと思います。なぜならお金は使い切ってしまうと終わりで、しかもその量は自分の人生の内での1にぎりの量だからです。それに比べ時間は、自分の人生の同じ分の量があるからです。簡単にいうと、もし死んでしまえば、その人の時間はそこで使い切れると言うことになります。時間は人それぞれの人生の長さにもなっているとと言えます。だから時間を有意義に過ごすということは自分の人生を有意義に過ごすということと同じです。このように考えてみると、お金というのは時間に比べてとてもちっぽけなものだということがはっきりわかります。だから私は時間の方がお金より大切だと思います。うことがはっきりわかります。だから私は時間の方がお金より大切だと思います。

上記の例で見て取れるように、母語においても効果的な discourse marker を奥などして、自分の考えをより整理してまとめあげることができるようになっていく。

以上中学生を対象にした研究成果については、雑誌論文の④に詳しく報告してある。

(2) 大学生を対象にしたマルチ・コンピテンス涵養の研究成果

①参加者: 国立大学生 15名

②テスト: 次の題目で、プレ、ポストともにライティング(作文)してもらった。

英語: "When you have to live far away from home to go to college, which would you prefer, living in a dorm or living in an apartment. State your opinion with some reasons and specific examples."

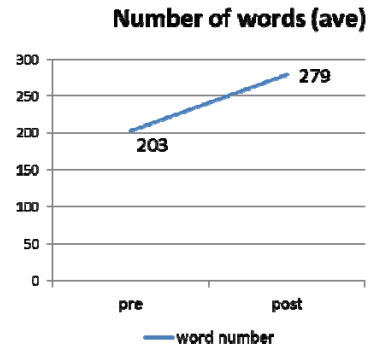
日本語: 「最近一部の学校では、週休2日制

を取りやめにして、土曜日授業をする学校が増えて来ていますが、あなたはこれについてどう考えますか?」

③指導方法: 15週間にわたり、上記研究方法で述べた指導を行なった。

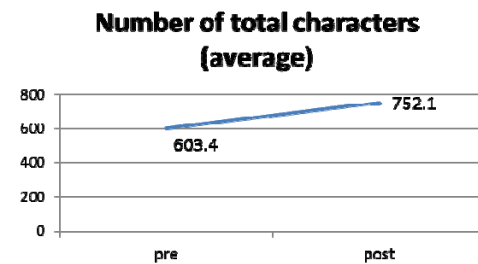
④結果:

・英文のライティングにおいて、総語数、総



$f = 0.00496$ $p < .005$

図2 大学生英作文総語数



$f = 2.70566$ $p < .05$

図3 大学生日本語作文総語数

文数共に、postにおいて有意な差を見せて伸びた。

・質的分析において Toulmn Model の要素を使って分析した。Claim, Warrant, Backing, Reservation の4つを満たした書き方をしたものの(これを Type A と呼ぶ)は、英語において、pre の13% から post の53%に上昇し、母語作文においても7%から20%に伸びた。また、Reservation がないものを Type B としたが、これに分類されるものは、英語の作文において、40% から27%に減少し、日本語作文においても、33% から27%に減少した。また、具体例(すなわち Backing)が理由(Warrant)より先行しているいわゆる

inductive な書き方をしているもの (Type C) は、英語において 34% から 13%へと大幅な減少を示し、母語作文においても、60% から 53%

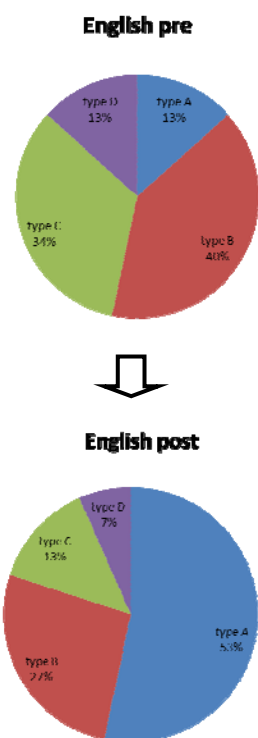


図4 英作文の論理展開の変化

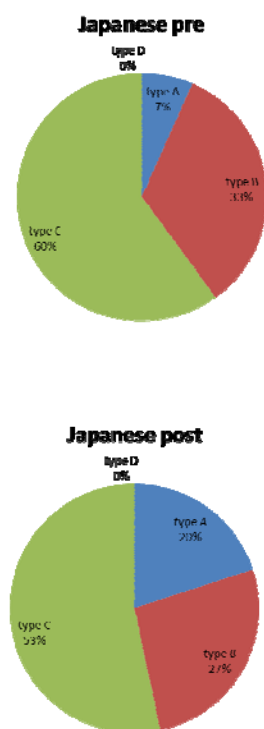


図5 日本語作文の論理展開の変化

へと減少していた。

本研究では日本語の作文は一切扱っていないので、日本語の論証文においても、このような書き方が見られたというのは、学習者は英語で学んだ論証文の書き方を自分のなかに持ち、それを母語作文にも応用したと考えられる。また、学生からの振り返りでは、「英語の論証文を練習したおかげで、他教科に提出するレポートも論理的に書けるようになりました」というようなコメントがあり、これらのことから、英語による論証文作成から multi-competence が培われたと考えて良い。

この研究成果は 2011 年に台湾で開催されたライティングの国際学会である Symposium on Second Language Writing で発表したが、大きな注目を浴びた。ただいま研究論文に仕上げるべく、執筆しているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①大井恭子(2011)「思考力・判断力・表現力を育成するライティング指導—言語活動の充実と外国語の指導の改善—」『中等教育資料』, No. 903, pp. 38-43, 査読有

②O*i*, K. & Toyoshima, H.(2011). A Study on the Effect of Hierarchical Concept Mapping in Writing for Junior High School Students 『千葉大学教育学部研究紀要』, 第 59 巻, pp. 223-228, 査読無

③大井恭子(2010)「学習者を育てるライティング—パラグラフ・ライティングとクリティカル・シンキング」、『英語教育』, 第 59 巻第

3号, pp.14-17, 査読無

④ Oi, K. (2010). English Writing Instructions That Aim at Incidentally Improving Japanese Writing —A Case Study Reflecting Vivian Cook's Multi-competence—, *Sophia Linguistica*, Vol.58, pp.29-50, 査読有

⑤ Uehara, M. & Oi, K. (2010). Lessons Aimed at Reducing Anomalous Use of the Verb “to be” in Japanese Junior High School Students' Sentence Construction. *KATE Journal*, Vol. 25, pp. 95-104, 査読有

〔学会発表〕(計8件)

① Oi, K. & Horne, B. Developing critical thinking skills through Japanese EFL writing classrooms. Paper presented at 46th IATEFL Conference at Glasgow, 2012.3.23, (UK.)

② 大井恭子 「英語と国語のコラボレーションーマルチコンピテンスという考え方ー」, 講演, 2011.11.25, (東京都立千早高校)

③ 松沢伸二、大井恭子、松井市子 シンポジウム『日本の英語教育の将来：新教育課程でのライティング指導を考える』 「中高大を見通した日本人学習者のためのライティングー Genre-based Pedagogy の視点を入れて」, 全国英語教育学会, 2011.8.21 (山形大学：山形市)

④ 大井恭子 「母語に活かす英語ライティング指導の試みーマルチコンピテンス育成を目指してー」(招待発表), 第83回日本英文学会, 2011.5.21 (北九州市立大学：北九州市)

⑤ 大井恭子 「発信力をつけるライティング指導の勧め」(招待講演), 新英語教育研究会, 2011.5.14 (大倉会館：横浜市)

⑥ Oi, K. Teaching Academic Writing to Japanese College Students Expecting the

Emergence of Multi-Competence, Symposium on Second Language Writing, 2011.6.12 (in Taiwan)

⑦ 大井恭子 『Contrastive rhetoric から universal rhetoric へーマルチコンピテンス理論をふまえてー』, 日英言語文化学会 2010.12.11 (明治大学：東京都)

⑧ 大井恭子・上原麻里 「アカデミック・ライティングを目指したライティング指導法の効果の検証」, 関東甲信越英語教育学会 第34回茨城つくば研究大会, 2010.8.20 (筑波大学：つくば市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大井 恭子 (OI KYOKO)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：70176816

(2) 研究分担者

無し